

高等讀本

山縣悌三郎編纂

一

T1A3

10

Y 22

山縣悌三郎編纂

高等讀本

文學社

明治二十七年四月十日
文部省再檢定済小學校教科用書

緒言

一此書は、小學校教則大綱に據り、高等小學校
讀書科の用書に供せんが爲め編述したるもの
なり。

一讀書科の大旨は普通の國文に通ぜしむる
に在るが故に、編者は特に心を文章の上を用ひ
たり。

一古人の文は純正にして模範とするに足る
べきものを撰ぶ。文章觀るべきも旨趣中正を得
ざるものは載せず。旨趣中正を得るも文章偏固

に傾くものは亦取らず而して取る所の文中其旨趣教科書として妥當ならざるもの及び語格の疑はしきもの、如きは添削訂正す。

一編者は國民教育を主眼とし生徒をして善良なる意志を養ひ堅固なる志操を鍊り自營獨立の氣象を興さしめんことを期す。故に修身齊家の事處世の事生業上の事等は務めて之を記載せり。

一本書の挿畫は小山正太郎君の手に成れるもの多し爲に本書の價值を増したること少からず茲に一言して之を謝す。

一本書は總て八巻とし二巻を以て一學年に配當す。然れども編者の意は必ずしも四年期の學校にのみ限らしむるにあらざるを以てこれを二年期に用ふるも又は三年期に用ふるも首尾聯絡を缺くが如き憂なく領得の學識に偏長偏短の弊を來すことなかるべきを信ず。

明治二十六年紀元節東京に於て

編者識す

高等讀本卷之一

目次

第一課	勅語	一
第二課	忠孝	二
第三課	孝子榮太郎	三
第四課	光陰惜むべし <small>貝原篤信</small>	五
第五課	近江聖人 <small>其一</small>	六
第六課	近江聖人 <small>其二</small>	八
第七課	一生の計 <small>貝原篤信</small>	九
第八課	各種ノ職業	十一

第九課 手 十二

第十課 原動力 十五

第十一課 書翰の心得 十七

第十二課 學友に贈る文 十八

第十三課 修業の心得 松木直秀 十九

第十四課 朋友 二十

第十五課 人各得失ある事 貝原篤信 二十一

第十六課 旅行のたのしみ 二十二

第十七課 全國漫遊 其一 二十三

第十八課 書を讀む事の譬 本居宣長 二十五

第十九課 全國漫遊 其二 二十七

第二十課 文學ノ傳來 三十

第二十一課 孔子 三十二

第二十二課 聖人のをくへ 三十四

第二十三課 養生の話 三十五

第二十四課 運動 三十六

第二十五課 口の出し入れ慎むべし 貝原篤信 三十八

第二十六課 呼吸 三十九

第二十七課 植物の話 其一 四十一

第二十八課 かんにんの四字 柳澤里恭 四十三

第二十九課

宇宙ノ洪大

第三十課

高橋東岡

四ノ四

四ノ四

高等讀本卷之一

第一課 勅語

我が大日本帝國ハ亞細亞洲ノ東方ニ在リテ、
 東北ヨリ斜ニ西南ニ延ビタル細長キ島國ナル
 ニヨリ各地ノ氣候モ自ラ一様ナラザレドモ概
 シテ温ニ土地ハヨク肥エテ海陸ノ産物亦甚ダ
 多シ。我が帝國ハカ、ル天然ノ幸福ヲ有スルノ
 ミナラズ萬世一系ノ 天皇陛下之ヲ知ロシ召
 サレテソノ長久天地ト與ニ窮リ無キハ實ニ

界中ニ其類ヲ見ザルナリ、サレバ人々常ニ友
勅語ヲ奉體シテ、帝國臣民タルノ務ヲ盡スベキ
ナリ。

勅語

朕惟フニ我ガ 皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏
遠ニ、德ヲ樹ツルコト深厚ナリ。我ガ臣民克ク
忠ニ、克ク孝ニ、億兆心ヲ一ニシテ、世々厥ノ美
ヲ濟セルハ、此レ我ガ國體ノ精華ニシテ、教育
ノ淵源亦實ニ此ニ存ス。爾臣民、父母ニ孝ニ、兄
弟ニ友ニ、夫婦相和シ、朋友相信シ、恭儉已レテ

持シ、博愛衆ニ及ボシ、學ヲ修メ、業ヲ習ヒ、以テ
智能ヲ啓發シ、德器ヲ成就シ、進ミテ公益ヲ廣
メ、世務ヲ開キ、常ニ國憲ヲ重シ、國法ニ遵ヒ、一
旦緩急アレバ、義勇公ニ奉ジ、以テ天壤無窮ノ
皇運ヲ扶翼スベシ。是ノ如キハ、獨リ朕ガ忠良
ノ臣民タルノミナラズ、又以テ爾祖先ノ遺風
ヲ顯彰スルニ足ラン。
斯ノ道ハ、實ニ我ガ 皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ、
子孫臣民ノ俱ニ遵守スベキ所之ヲ古今ニ通
ジテ、謬ラズ、之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ。朕、爾臣

民ト俱ニ拳々服膺シテ成其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ。

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

第二課 忠孝

君臣父子は人道の大本なり。臣の君につかへて誠をつくすを忠といひ、子の親につかへてまことを盡すを孝といふ。この忠と孝との二つは臣子たるもの、特に力を盡すべき所なり。すべ

て萬の事學ばざれば假令まことの志ありともその理を知らずして正しき道を行ひ難し。されば忠と孝との二つに志ある人にては學びて其道を知らざればみづからは忠と思ひて行ひ、事柄もかへりて不忠となり、孝と思ひて爲し、事柄もかへりて不孝となることあり。故によく忠と孝との道を學びあきらめてかゝる間違に陥らぬやうに心掛くべし。古人も學問の要は忠と孝とを行ふにありといへり。萬善ありといへども忠孝の道にうとよきものは君子といふべか

らず。

第三課 孝子久左衛門

淡路の國の由良に久左衛門といふ民あり、父を愛する事人に過ぎたり。出で、田を耕へすと、いへど父を思ふことあれば鋤をすて、歸り父を見て又往く、人に雇はれて外にありける日も、俄に雨風あれてろろげなれば、主人に請ひて走り歸り、父を慰めて出づることなし。これ父を慰めんとのみにもあらず、己が雨風にをかさ

れん事を父や憂へむとれうれてなりけり。父出で、己が作る田見んといへば、即ち父を脊に負ひてゆきめぐり、或は畔にしろし置きて、うの心を慰めけり。父衰へ疲れて出で、見る能はざるに及びては、極めてよき稻穂摘み來りて見せける。父を喜ばしめんとてなり。冬の夜殊更に寒き時は、夜中曉ともいはず、必ず起きて、衣をもとめて、父がふすまに加ふるなど、父を愛するさま到らざる所なし。うの里人皆其孝行をほめきこえければ、國の事あづかりける。稻田某召し喚びて

汝が孝行の有様つばらに語れといへば久左衛門人は我れを孝子なりと申侍れどあれ更に孝ならずとなん答ふる其様聊か言葉つくる道知るべくもあらず已まことに孝ならずと思ふなるべし。又問ふ汝今日こゝに來れる事父知れるや否や曰く平生家を出づるには必ずその事の實を告げ侍れど今日は然らず只此あたりの市にゆくとなん申つると稻田又問ふいかで實を告げざりしやと久左衛門れほやけの召しありときかは此事なめりと知らざらむ程は父を

て心もとなく思はしむべければあざと告げ申さざりしとぞ答ふる稻田打嘆きてその孝心を感ず物を賜ひてかへしけるとなんうれ孝はた父母の志を養ふを貴しとす味を調へ暖かなるを被せてその體を養ふことをつとむども心をやすむることなくば眞の孝行にはあらず久左衛門賤しといへど其孝たゞ志を養ふに在りたらとまざるべけんや。

古語に光陰箭の如く時節流るゝが如く、又曰く光陰惜むべし、これを流水にたとふといへり。月日のはやき事、どゞくにまさる。一たびゆきてかへらざる事、流水の如く、今年の今日の今時、再かへらず、なす事なく、なほざりに時日をたくるは、功をいたづらになすなり、をくむべし。大禹は聖人なり、だになほ寸陰ををくみ給へり。いはんや他の凡人をや。聖人は尺璧をたふとばずして、寸陰ををくむともいへり。少年の時は、記性つよくして、中年以後、數日にたほゆる事を、只

一日半日にもたほいて、身ををはるまであすれず、一生の寶となる。年老いて後悔なからん事を思ひ、小兒の時、時日ををくみて、いさみつとむべし。かやうにせば、後悔なかるべし。

具原篤信……家道訓

第五課 近江聖人 其一

今より二百餘年前、近江聖人と稱せられし中江藤樹先生は、通稱を奥右衛門といへり。近江に生れ、幼き時より祖父に従ひて、伊豫の大洲に在

り。十一歳の時、大學
を讀み、自天子以至
於庶人、壹是皆以修
身爲本とある句を
見て、大に悟りて曰
く、此經幸に今に存
すれば、學びて聖人
に至ること難から
ずと。十七歳の頃、京都より一人の僧、大洲に來り
て、論語を講釋せしが、此時大洲の風俗唯武事を



自傳の生れ附圖

修むるを知りて、文學をばいたくいやし、講釋
を聽くもの少かりしに、先生は獨り往きて之を
聽かれたり。僧は居ること一月餘にて立ち去り
しが、其後一部の四書大全を得て、喜ぶこと限り
なく。されども人の誹りを憚りて、晝は終日講士
と武を講じ、夜ふけて後密に出だして、之を讀む
を常とせり。

先生常に母の獨り故郷にいますを憂ひて歸
省すること屢なりしが、常に其左右にはべりて
孝養せざれば、心安からずとて、伊豫に伴ひかへ

らんことを勸むるに母は遠き海を渡りて他國
に移り住むを嫌ひ聽き入れざりしかば先生獨
り大洲に還り情を陳べて仕を辭しけれども君
侯はこれを聞きて其孝心の深さを感ずかゝる
人物はまた得難しとて益惜みて許し給はずさ
らば一生二君に事へざるべしとの誓を立て
固く請ひけれど猶許されず因て已むことを得
ず官を棄てて故郷に逃げ歸れりとは二十七歳
の時の事なりき其歸らんとする時先づ悉く家
財を賣り拂ひて負債を濟し其餘れる金もて米

を買ひ藏に積み置けり是は俵米を還し奉らん
の心なりしとぞ。さて後餘れる錢は僅に三百文
に過ぎざりしが其家に召使ひける老僕のさし
あたりよるべを失ふを愍みて二百文を與へ已
は百文を腰に附けて出で行きぬ。

先生故郷に歸りけれども家素より富めるに
あらぬば様々に辛苦して母を養ひ其旁に近鄰
の人々を集めて書を教ふるに常に躬を以て人
を帥めしかば皆其徳に服して令名遠近に聞け
一郷の風俗これが爲に全く改まり果ては遠方

より尋ね來りて教を請ふものさへあるに、
り。

第六課 近江聖人 其二

藤樹先生或る夜外より歸り來るに、數人の賊
不意に林の中より現れ出で、路を遮り、「我等に
酒代を出だせ」と曰ふ。先生熟其有様を視て、囊中
より錢二百文を出し、「これを與へん」と答ふ。賊大
に怒り、各刀を抜きつれて、大聲に罵るやうか、
るは、た錢何かせん、速に身ぐるみ脱いで行け

若し我等が言葉に背かば、此刀の錆として呉れ
ん」と濁聲を木魂に響かせ、物すごく罵る。先生少
しも懼るゝ氣色なく、「やよあつる勿れ、吾先づ
與ふべきか、與ふまじきかの理を考へん」とて、手
をこまぬき目を閉ぢて暫くありしが、やがて賊
に向ひ、「假令闘ひて死するまでも、汝等に與ふべ
き理なし、いざや勝負を決せん」と刀を抜いて身
構し、闘ふ者先づ姓名を告ぐるは、武門の式なり
我こそは近江の國小川村の住人、中江實也
なれ、汝等はいづこのものぞ、名のれ、

はれば賊は驚き直ちに刀を投げ棄
地を打ち叩き我が近村の人々幼兒までも藤村
先生の長者たることを知らぬものなり我等盜
賊たりともいかで先生に無禮すべき先生とは
露知らでかゝる無禮の舉動に及びしことを悔し
けれあはれ此罪を許させ給へ」と眞心より愧入
りて詫びければ先生言葉を和らげて人誰か過
をからん過ちて能く改むるを貴うとすとて明
に人たるものゝ道を説き示されけるに賊も皆
感泣し遂に心を改めて良民となりしとぞ。

備前侯光政は人をして先生を聘せしめしに
老いて且疾ありとてこれを辭し其子と弟子と
を遣はして仕へしむ。慶安元年病みて歿す年四
十一。學庸解翁問答鑑草等の著あり。

先生歿して後二百餘年其地の民猶ほ先生を
尊崇し其故居を過ぐるときは必ず笠を脱ぎ地
に跪き拜すといふ。其遺徳の大なること知るべ
し。

古語に、一生のはかりごとはいへり勤めざれば萬の事行はれず身をたどかたし。又一生のつとめは若き時にあり身を立るはかりごとは三十歳の内に覺悟すれば一生の家業成立つ其内覺悟なく怠れば一生立ちがたし。一年の計は春にあり春の間たこたりぬれば一年の事を難し。一月の計は上旬にあり朔日より十日までの内につとむれば一月の事成りやすし十日の間に末二旬の日數をたのみてたれば其事成就し難し。一日のはか

りごとは朝にあり朝に一日の間の事をよく考へ定め早く勤むればはかゆく若し朝の間たこたれば一日のつとめはかゆかず。又明日の計は今夕にあるべし明日の事を明日はからんとて今日定めざればつまづきてはかゆかず。

貝原篤信……大和俗訓

第八課 各種ノ職業

農夫ハ穀物野菜ノ耕作ニ忙ハシク商賈ハ貨物ノ賣買ニ忙ハシク工夫ハ物品ノ製造ニ忙ハ

シ。魚ヲ網スル漁夫舟ヲ行ル水手等其職業コソ
千差萬別ナレ、管ム所ハ何レモ世間ノ需要ニ應
ゼントスルニアリ。

抑人ノ此世ニ在ル互ニ相依リ相應シ功ヲ易
ヘ智ヲ通ジテ互ニ相利スルモノナリ。彼ノ農夫
ノ耕作スルハ我ヲ養フ穀菜ヲ生ズルナリ。商家
ノ貨物ヲ鬻グハ我ガ需ニ應ゼンガ爲ナリ。我ガ
衣服ハ自ラ作りシニアラズ。養蠶家ハ蠶ヲ飼ヒ
農夫ハ棉ト麻トヲ作り紡婦ハ紡ギテ絲トナシ
織女ハ織リテ絹布綿布麻布ヲ製シシカル後我

等ノ衣服トナルナリ。

サレバ人類ハ孤立シテ生テ遂グベキモノニ
アラズ、他人ノ爲ニ業ヲ勵ミ、他人モ亦我等ガ爲
ニ職ヲ勉メ、以テ各其生ヲ營ムヲ得ルナリ。故ニ
諸子モ成長ノ後ハ夫々ノ職業ニ就キ人タルモ
ノ、本分ヲ盡サザルベカラズ。

第九課 手

人其好ム所ノモノアリ、惡ム所ノモノアリ、好
ム所ノモノニハ手之ニ觸レ、惡ム所ノモノニハ

手之ニ觸レザルコト其思フマ、ナルハ奇ナリ
トイフベシ。耳鼻ナドニ至リテハ然ルコト能ハ
ズ。如何ニ快カラザル音響ニテモ其耳邊ニ達ス
ルトキハ必ズ聽カザルヲ得ズ。如何ナル惡臭ニ
テモ其鼻頭ニ來ルトキハ必ズ嗅カザルヲ得ズ。
目ノ如キハ瞼ヲ閉ヂテ能ク不快ノ物ヲ避クル
ヲ得レドモ瞼ヲ開ケハ則チ之ヲ見ザルヲ得ズ。
固ヨリ手ノ自由ニ其惡ム所ヲ避ケ好ム所ニ就
クヲ得ルノ比ニ非ス。手ハ音ニ自由ニ己ガ用ヲ
爲スノミナラズ耳目口ノ代用ヲモ爲スコトア

リ。茲ニ盲人アラバ其手ハ目ノ代用ヲ爲スベシ。
即チ杖ニ頼リテ市街ヲ徘徊シ文字ノ形ニ觸レ
テ書ヲ讀ムガ如キ是ナリ。又耳聾ヒタル人ニ向
ヒ己ガ意想ヲ通ゼンニハ手眞似ヲ以テ談話ニ
カフルヲ得ベシ。聾者啞者ガ巧ニ指頭ヲ以テ思
ヲ他人ニ通ズルガ如キ人ノ能ク知ル所ナリ。
手ハ又耳目等ノ力ヲシテ一層強大ナラシム
ル効用アリ。例ヘバ遠ク星光ヲ望ムニ當リ手ヲ
翳セバ一層分明ニ見ルヲ得ベシ。是レ手ハ望遠
鏡ノ効用アルニ似タリ。又極メテ微細ナルモノ

ヲ視ルニ、手ヲ以テ目ノ周圍ヲ蔽フトキハ、精密ニ視得ベシ。是レ手ハ顯微鏡ノ作用アルニ似タリ。

耳ヲ樂マシムベキ音樂ノ器械ヲ製スルモ、此手ナリ。鼻ヲ喜バシムベキ芳香アル花枝ヲ折リ來ルモ、亦此手ナリ。又談話スル間ニモ、手ノ助ヲクバ、如何ナル辯舌モ、人ヲ感動セシムルコト薄カルベシ。

手ノ効用ハ、香コレノミナラズ、劍ヲ握ラバ、圖フヲ得ン、鋤ヲ把ラバ、耕スヲ得ン、琴ヲ抱カバ、美音ヲ發スルヲ得ン、筆ヲ執ラバ、書畫ヲ寫シ、又其意想ヲ述ブルヲ得ン。

夫レ手ヲ動カシ用フルトキハ、何事カ成ラザラン。彼ノ蒸氣機關ノ如キ宏大ナル裝置モ、其始メハ、人ノ小サキ手ヨリ成レルモノナリ。戰國ノ具タル大砲及ビ他ノ武器ノ如キ堅ク銳キモノモ、亦柔カナル手ニテ造リシモノナリ。船舶鐵道、燈明臺、宮殿、城郭等モ、皆人ノ手ヨリ造リ出シタルニ外ナラザルナリ。

又手ハ善事ヲモ爲スベク、惡事ヲモ爲スベキ

ナリ。諸子ハ以テ如何ナル事ヲ爲サント欲スル
カ。之ヲ用フルニ當リテハ、大ニ心ヲ用ヒザル可
カラズ。

世ニハ、手工ニ從事スルヲ賤ムモノアレドモ、
コレ大ナル誤ナリ。手工ハ、着實善良ナル男女ノ
從事スベキモノナリ。若シ世ニ手工ニ從フモノ
ナカラシニハ、我等ハ殆下生活スルコト能ハザ
ルベシ。

工匠ノ手ハ鋸ヲ把ルベク、冶工ノ手ハ鎚ヲ把
ルベク、農夫ノ手ハ鋤ヲ把ルベク、舟子ノ手ハ舵

ヲ把ルベク、兵士ノ手ハ劍ヲ把ルベク、文人ノ手
ハ筆ヲ把ルベシ。諸子ハ、他日如何ナル器械ヲ把
ラントスルゾ。

第十課 原動力

方今理學ノ進歩スルニ從ヒ、其應用日ニ月ニ
盛ニシテ、人生ヲ益スルコト尠カラズ。今世人ガ
使用スル原動力ノ中、其主要ナルモノヲ擧ゲバ、
重力、彈力、人體ノ筋力、獸力、風力、水力、蒸氣力、電氣
力是ナリ。

重力ハ物ノ重サノ力ニテ之ヲ利用セバ種々ノ機械ヲ運動セシムベシ即チ時計ノ搖錘ノ如シ又懷中時計ノ如キハ重力ヲ用フベキ餘地ナキガ故ニ之ニ代フルニ彈力ヲ以テス蓋シ鋼鐵其他強力アル金屬ヲ延ベテ細條トナシ之ヲ捲キ置クトキハ常ニ原形ニ復セント欲スル力即チ彈力アルヲ以テ能ク機械ヲ運動セシムルナリ。

人體ノ筋力ハ甚ダ強ケレドモモト限アルヲ以テ獸類ノ筋力ヲ利用スルコト多シ就中馬ヲ

獸力中ノ第一トス馬ハ其筋力強健ニシテ一馬ノ力ハ能ク五人ノ力ニ敵スベシ健馬ハ四十貫ノ荷物ヲ負ヒ一日ニ八里乃至十里ノ道ヲ行クヲ得ベシ。

風力及ビ水力ハ効用頗ル廣大ニシテ獸力ノ比ニ非ズ風力ハ帆船ヲ行ルニ功アリ又風車ニ使用シテ農工ノ業ニ利アリ然レドモ其缺點ハ風勢ノ強弱常ニ同ジカラザルト風ナキ時ニハ機械全ク其用ヲ作サザルトニ在リ水力ノ効用ハ風力ヨリモ廣大ニシテ小河ノ流水モ能ク巨

高等讀本 卷之一
大ナル機械ヲ運轉スベシ。近世水車ノ法夫ニ開
ケ、木材ヲ切り、絲ヲ紡ギ、布ヲ織リ、穀物ヲ舂ク等
其應用極メテ多シ。

蒸氣力及ビ電氣力ハ原動力中ノ最モ強大ナ
ルモノニシテ、以テ船車ヲ馳驅スベク、以テ機械
ヲ運轉スベシ。其農業ニ、工藝ニ、便益ヲ與フルコ
ト舉ゲテ數フ可カラズ。

以上諸種ノ原動力ハ到ル處自然ニ存在シテ、
吾人ノ需用ヲ待ツモノニ似タリ、サレバ人能ク
勤勉ノ手ヲ以テ巧ニ之ヲ已ガ職業ノ上ニ利用

シ、毫モ怠ルコトナカラシニハ、富有ヲ造出スル
コト、決シテ難キニアラザルベシ、

第十一課 書翰の心得

書翰を認むるには、自ら一定の法則ありて之
を守らざるは無禮なり。人を呼ぶに様といひ、殿
といひ、君といひ、兄といひ、己を稱するに私拙者
僕、小生など書し、又頓首、再拜、敬白、謹言などの文
字を記すは、書翰を認むるにつきての禮なり。
すべて書翰は、後までも残るものなれば、粗略

の文字を書き不敬の語句を用ふべからず。文句を誤り認むるときは、其意の先方に通ぜざるのみならず、時としては圖らざる間違をひき起すことあるべし。されば輕忽に書かざらんことを望まうけれ。

書翰の用は、たゞ意を通ずるを得れば、それにて足れりとして、粗略に取扱ふは甚だ宜しからず。書翰を見て、以て其人の才智の多少を知るべく、學問の淺深を量るべく、又其性質の如何をも推察すべし。

又返書は成るべく速に認め贈るべし、故なく之を遲滞するは無禮の甚きものなり。

第十二課 學友に贈る文

拜啓承ねた過日の試験よく首尾よく尋常か
學科卒業相成候由奉賀の尚ほ、
んで高等小學後へ御入學後成る趣、
御事と編に感謝仕候、
の教科は尋常小學校の教科に較ぶると、
六か數のみならず、更に地理歴史理科圖書唱

歌等の科目相増中候就ては餘程勉勵の心
 らゞは滞りなく卒業の事實果なく候次第も
 の學の初は學科の多きと云ふが敷とたは苦しみ
 如何はせん心配致候ひが事は勉強に在
 りまた精神一到行事が成らんを中申す
 ことも兼て承り居り間其後日夜必死と勉強
 仕の故にや困難も退々減り困難の減るるに
 従ひて漸々樂みを増し今日に及ばは此後の課
 業は何れも面白く相成は尊兒は兼てより衝
 心懸るるに漸々成候は高等學科に

卒業は同じく容易の事と奉存は先は済脱が
 たゞ御参考までにあつて申上候頓首

第十三課

修業の心得

何事ニヨラズ業ニ就キテハ怠ル可カラズ成
 功ハ急グ可カラズ唯常ニ心ヲ此ニ存スベシ成
 功ニ急ナレバ退屈ノ念生ジテ事遂ゲ難シ業ニ
 就キテ怠ラザレバ面白ク其間ニ生ジテ成功ノ
 全キヲ致ス可シ學問ノ道ハ事業ノ中ニテモ最
 モ難キモノナレバ最モ此處ニ心得ナクハ有ル

可カラズ。然ルニ學生ノ常トシテ、初ノ程ハ隨分能ク勉強スレドモ、漸クニシテ、退屈ノ念ヲ生ジ其甚ダシキハ、終ニ廢學スルニ至ル者アルハ、畢竟成功ヲ望ムコトノ急ナルニヨレリ。大工、左官ノ如キ、卑近ノ業スラ、尙且數年ノ年季ヲ入レテ、之ヲ修ムルニ非ザレバ、其大工ナリ、左官ナリ、一人前ノ職工トハナル事ヲ得ザルニ非ズヤ。況シテ人ノ人タル道ヲ修ムル學問ノ道ニシテ、容易ニ成就スベキ者ナランヤ。元來人ノ精力ハ、限アル者ナレバ、非常ニ勉強スルハ、却テ非常ノ怠惰

ヲ生ズル基トモナル可シ。故ニ非常ノ勉強ヲ要セズ、眠食常ヲ失フコト無ク、職有ル者ハ職ニ從ヒ、産業有ル者ハ産業ヲ治メ、サテ後暫時ニテモ暇アル時、心ヲ專一ニシテ、修學スベシ。朝ニ溫メテ夕ニ冷スコト勿レ、昨日ハ勤メテ今日ハ怠ルコトナカレ、此ノ如クニシテ、日々ニ變ズルコト無ク、月ヲ累子年ヲ積ミテ、已マザランニハ、假令職業ノ餘暇ニ學ブ者ト雖モ、其成功ノ全キヲ致スコト、疑ヒナカルベシ。

松木直秀……琴圖漫錄

第十四課 朋友

朋友ハ、人ノ最モ貴重スベキモノナリ。學問ノ益ヲ受クルモ朋友ナリ、生涯ノ幸福ヲ導クモ朋友ナリ、艱難ヲ助ケ、危急ヲ救フモ朋友ナリ。故ニ平生人ト苦樂ヲ共ニシテ、己ガ喜ハ之ヲ人ニ分チ、人ノ憂ハ之ヲ己ニ分ツベシ。斯ノ如クセバ、必ず多クノ良友ヲ得ベシ。

諸子ガ悲歎ノ事アル時ニ當リ、朋友來リテ勇氣ヲ與ヘ、諸子ト憂ヲ俱ニセバ、諸子ハ之ガ爲ニ自ラ心ヲ慰ムルコトアルベシ。譬ヘバ爰ニ一物

アリテ之ヲ支持センニ、一人ナレバ重クシテ堪ヘ難キモ、二人ナレバ輕クシテ堪ヘ易キカ如シ。今都市或ハ村落ノ途中ニテ、圖ラズ朋友ニ出逢ハンニハ、互ニ微笑シテ之ニ接シ、懇ニ禮ヲ爲シテ歡語スルナラン。況ヤ遠國ノ旅中偶然郷友ニ邂逅セン時ノ如キ、其愉快果シテ如何ゾヤ。

夜間物寂シキ時、若クハ病ニ臥シテ徒然ナル際、親友來リテ門ヲ叩カバ、諸子ハ忽チ起キテ、如何ナル感情ヲ惹キ起ス。

ノ寶庫ノ如シ。此寶庫ハ、鉅萬ノ
タシ。世ニハ財寶ヲ得ンガ爲ニ、勉強スル
レドモ、良友ヲ得ンガ爲ニ、苦心スル人少ナキハ
怪ムベシ。富ミテ家ニ財寶ヲ滿タサンヨリモ、貧
シクシテ良友ノ天下ニ多キコトコソ、人生中ノ
最大幸福ナルベケレ。

第十五課 人各得失ある事

人の生れつきは各同くからず得たる所あり
得ざる所あり。此に得たりと雖も彼に得ざる所

あり。何事も一人の身によき事備はれる人無し。
其人の得たる所を用ひて得ざる所を責む可か
らず。一事善き事あらば取り用ひて其餘のよか
らざるを尤む可からず。我身を顧みば得ざる所
また多かるべし。若し人の得ざる所を責めて得
たる所を捨てば天下に用ふべき人無く交はる
べき人なかるべし。得たる所を取り用ひ得ざる
所を容して責めざれば天下にすたれる人無か
るべし。人に交はるにも此の如くすれば人の恨
なり。

第十六課 旅行のたのしみ

旅行して他の郷に遊び山水の麗はるき景色を眺め神社佛閣などの奥ふかき境に臨めばれのづから良心を感じ起し鄙しき心を洗ひ去り世の中のおづらはしき事を打ち忘れて徳を進め知を廣むるの助となること多かるべし。又其里人に逢ひて其所の風土又は古跡を尋ね問ひ或は其里に出づる名物を見て心を慰むるなど

最と珍し。

すべて名勝の地に遊びて見聞せしことは唯一時の耳目を喜ばしむるのみならず老の後に至りても其見聞せし有様は折りく思ひ出でられて忘ることなかるべし。まして其見聞せしことどもを書き留め置きたらんには未々の人までもこれを見てどもに遊びし心地せらるべし。

余ハ、本年ノ夏期休業中ニ、全國ヲ漫遊シ、是マ
 デ書物ニテ學ビタル地理歴史等ノ事柄ヲ、實地
 ニ穿鑿セント思ヒ立テ、先ヅ東海道ヨリ畿内ヲ
 經テ、中國ニ入り、四國九州ニ渡リ、轉ジテ東奥及
 ビ北海道ニ遊ビ、四週間ニシテ歸レリ。今ヤ全國
 到ル處、汽車アリ、汽船アリ、往來便利ニシテ、今日
 百里ヲ行クハ、昔日十里ヲ歩ミシヨリモ易シ。サ
 レバ昔日全國ヲ周遊スルハ、一年餘ヲ費シシモ、
 今ハ僅ニ四週間ニテ之ヲ爲シ了ルヲ得其差異
 モ亦甚シカラズヤ。

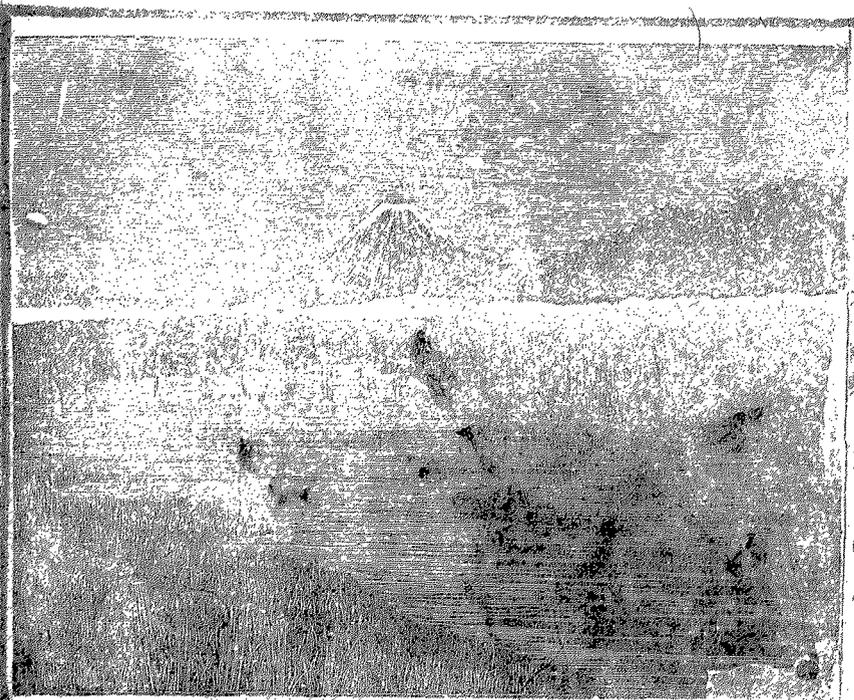


汽 車 新 橋 行 往 品 川 海 波 發 車 場 之 景 觀

余ハ、八月一日、東京
 新橋ヨリ汽車ニ乘レ
 リ。新橋神戸間ハ、三百
 七十六哩餘ニシテ、直
 行スレバ二十時間ニ
 達スベシ。汽車新橋ヲ
 發スレバ、品川海波穩
 ニシテ、白帆ヲ砲臺ノ
 間ニ見ル、風景頗ル佳
 ナリ。品川、川崎、神奈川

等ノ停車場ヲ過ギテ、横濱港ヲ望メバ、帆船林立シテ、大小船舶ノ出入極メテ繁シ。横濱ハ東京ヲ距ルコト僅ニ二十八哩、我が國開港場中第一ノ地ニシテ、貨物ノ運輸最モ盛ナリ。是ヨリ大船大磯ヲ過グ。大船ヨリ支線アリ、横須賀ニ至ル之ヲ横須賀鐵道ト稱ス。大磯ハ海水浴ニ適スルヲ以テ名アリ。余ハ箱根山ヲ越エントスルヲモテ、國府津ヨリ汽車ヲ下リ、鐵道馬車ニテ小田原ニ達ス。小田原ハ箱根山ノ東麓ニ在リテ海ニ臨ミ、頗ル要害ノ地ナリ。昔時北條氏ノ居城ナリシヲ以

テ其名高シ。已ニシテ鐵道馬車ハ箱根ノ湯本ニ達ク。是ヨリ徒歩シテ山ニ入ル。路惡キコト驚クニ堪ヘタリ。昔日此處ヲ海道第一ノ險ト云ヒシモ實ニ理ナリトイフベシ。山間ニ溫泉多シ、謂ハユル箱根七湯是ナリ。箱根ノ宿ハ山上ニ在リ、コトニ一泊ス。宿ノ傍ニ大湖アリ、蘆湖トイフ。湖畔ヨリ纒ニ富士ノ巔ヲ望ム、風景ノ美譽ヘン方ナシ。翌日山ヲ下リ、三島ヲ經テ、沼津ニ至リ、又汽車ニ乘リ、愛鷹山ノ麓ナル浮島ヶ原ヲ過ギ、富士川ヲ渡ル。河口ハ、即チ田子浦ナリ。富士ノ高嶺ハ千



田子浦ヨリ富士ヲ望ム

古ノ雪ヲ戴キテ我が
 行ヲ迎フルガ如シ其
 山腹ニ突起スル小山
 アリ謂ハユル寶永山
 ナリ此邊ハ東海道第
 一ノ絶景ニシテ昔山
 邊赤人ガ
 田子の浦ゆ打ち出
 で、見れば眞白に
 ぞ富士の高嶺に雪

は降りける

ト詠シタルハ此處ナリ。又治承ノ昔平氏ノ大軍
 源頼朝ヲ伐タントテ下リシニ、水鳥ノ羽音ニ驚
 キ怖レテ逃ケ還リシモ此處ナリ。車窓ヨリ遙ニ
 三保、松原ヲ眺メ、間モナク静岡ニ着ク。此地ハ府
 中ト稱シ、又駿府トモ呼ベリ。徳川家康老後隱居
 セシ所ナリ。駿遠二州ノ界ニ大井川アリ、昔ハ橋
 ヲ架スルコトナク、旅人皆人ノ肩ニ駕シテ渡リ
 シトゾ。其旅行ノ困難ナリシコト想ヒヤラル。遠
 江ニ入り、天龍川ヲ渡リ、有名ナル濱名湖ヲ過ギ

高等讀本 卷之十一
三河ニ入ル。三河トハ、豊川、矢矧川、大平川ノ三
大河アルヲ以テ名ケシナリ。岡崎ハ、矢矧川ノ東
岸ニ在リ、モト本多氏ノ居城ニシテ、歴史上有名
ノ地ナリ。熱田ニ至レバ、近ク名古屋城ノ金ノ饒
ノ輝クヲ見ル。

名古屋ハ、東西兩京ノ中間ニ在リ、三府ニ亞ゲ
ル都會ナリ。其城ハ、慶長年中、徳川義直ノ築キシ
名城ナリ。市街熱田ニ連リ、東西水陸ノ運輸頗ル
便利ナリ。其近郷ニ瀬戸村アリ、陶器ノ製造ヲ以
テ著ル。熱田ハ、熱田神宮アルヲ以テ、單ニ宮ト呼

ブ、此地ハ伊勢へ渡ル要津ナリ。

第十八課 書を讀む事の譬

須賀直見が言ひしは、廣く大なる書を讀むは、
長き旅路を行くが如し。面白からぬ所も多かる
を經行きては、又面白く目さむる心地する浦山
にも至るなり。又足強き人は早く、弱きは行くこ
と遅きも、よく似たりとぞいひける。をかき譬
なりかし。

名古屋ヲ過グレバ清洲ナリ。此地ニ織田信長ノ城趾アリ。美濃ニ入レバ岐阜大垣ノ市街アリ。有名ナル關原ノ古戰場ヲ經テ、膽吹山ノ麓ヨリ近江ノ米原ニ達ス。此地ヨリ北ニ赴ク鐵道アリ、越前敦賀ニ達スル線路ナリ。東海道線ハ琵琶湖ノ東ヲ通り、湖邊ノ風景頗ル佳ナリ。勢多川鐵橋ノ下流ニ長橋ノ横ハルヲ見ル、謂ハユル勢多ノ長橋ニテ、近江八景ノ一ナリ。勢多ハ要害ノ地ナルヲ以テ、源氏北條氏等ノ兵ヲ京都ニ出ダスト

キ、必ズコ、ニテ一戰セズト云フコトナカリキ。草津ハ關西鐵道ノ發スル所、大津ハ滋賀縣廳ノ在ル所ナリ。逢阪山ノ隧道ヲ出ヅレバ、程ナク京都ニ着ス。

京都ニテ汽車ヲ下リ、一日滯留シテ洛中洛外ノ名所舊蹟ヲ探レリ。京都ハ桓武天皇ノ延暦十三年ヨリ、明治元年マデ、七十一代一千七十餘年間ノ帝都ニテ、舊皇居ハ市街ノ東北隅ニアリ。今ハ京都離宮ト稱ス。二條城ハ其西方ニ在リ。鴨川ヲ隔テ、東ノ方ニ並立スル一帯ノ連峯アリ、コ



圖ノ殿正隆

レテ東山ト云フ。其麓ニハ、黒谷知恩院、清水寺、大佛殿、三十三間堂、泉涌寺、東福寺等ノ巨刹アリ。

京都ヲ廻リタル後路ヲ轉シテ、奈良、吉野ニ遊ベリ。奈良ハ、大和國ノ北隅ニ位シテ、山城ニ近シ。元明天皇以

來、七世七十餘年間ノ皇居ナリシヲ以テ、今尙ホ南都ノ稱アリ。ソノ春日社ハ、老樹生ヒ茂リテ、麋鹿其間ニ羣リ遊ベリ。東大寺ハ、謂ハユル大佛ノ在ル所ニテ、規模ノ宏大ナル。奈良朝ノ昔、佛教ノ盛ナリシ様モ追想セラル。吉野ハ、奈良ノ南方ニ在リ。後醍醐天皇ノ南幸以後、五十餘年間ノ行在所ナリ。滿山ノ櫻樹幾千株ナルヲ知ラズ。近時八田知紀ノ歌ニ、

芳野山霞の奥は知らぬども

見ゆるかぎりは櫻なりけり

高等 讀本 卷之六 一
我が國櫻花ノ名所ヲ言フ者必ズ先ヅ指テ此地ニ屈ス。余ハ南朝ノ遺蹟ヲ吊ヒ、後醍醐天皇ノ山陵ヲ拜シ終リテ、再ビ奈良ニ還リ、汽車ニ乘リテ大阪ニ赴ケリ。

大阪ハ古ノ浪華ノ地ニテ、東西諸國ノ要津ニ當レリ。溝渠四方ニ通シ、運漕極メテ便ニ、商業最モ盛ナリ。有名ナル大阪城ハ、天正年間豊太閤ノ築キタルモノニテ、今ハ僅ニ牙城ヲ存スルニ過ギザレドモ、ナホ當時規模ノ壯大ナリシヲ想ヒヤラル。北ニハ天滿宮アリ、東南ニハ四天王寺ア

リ、寺ハ聖德太子ノ建立ニテ、一千有餘年ノ舊蹟タリ。

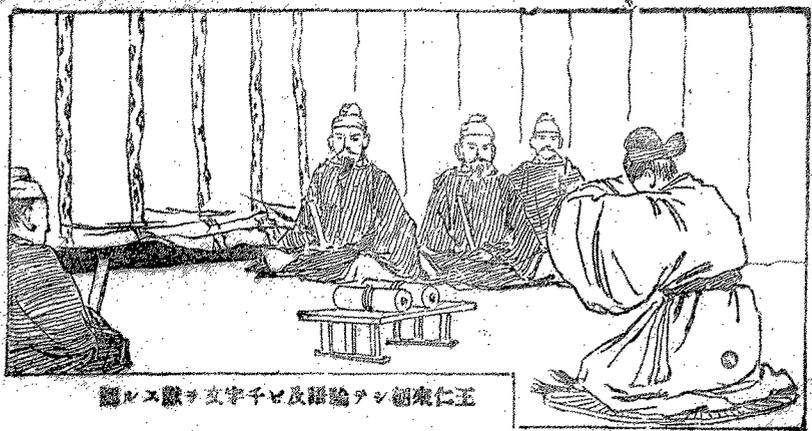
余ハ又梅田停車場ヨリ、汽車ニ乘リテ神戸ニ達ス。大阪神戸ノ間ハ、二十哩餘トス。此地ハ開港場ノ一ニテ、繁華横濱ニ亞グ。南ハ茅渚海ニ臨ミ、北ハ丘山ヲ負ヒ、氣候溫暖ニシテ、空氣清淨ナリ。市ノ中央ニ在ル湊川ハ、楠公忠死ノ地ニシテ、徳川光圀ノ建テタル

嗚呼忠臣楠子之墓

高等讀本 卷之八
ノ碑ハ湊川神社ノ境内ニ在リ。

第二十課 文學ノ傳來

我が邦上古ニハ文字無カリシカバ何事モ唯口々ニ相傳ヘシニ過ギザリキ。後三韓ト交通スルニ及ビ支那ノ文字漸ク傳來セシガ經書ニ據リテ學ヲ講ズルニ至リシハ紀元九百年代應神天皇ノ時ヲ始トス。此時百濟王ハ其臣阿直岐ヲシテ來朝セシメケルニ阿直岐善ク經典ニ通ゼシカバ皇子稚郎子ハ之ニ從ヒ學ビ給ヘリ。天皇



聖武天皇ヲ文字千字及經論ヲシテ來朝シテ

阿直岐ニ問ヒ給ハク「汝ガ國ニ汝ヨリ賢レル博士ナキカ」ト對ヘテ申サク「王仁トイフモノアリ博學ニシテ一國ノ秀才ナリト。是ニ於テ使ヲ遣リテ之ヲ徵ス。王仁來朝シテ論語十卷千字文一卷ヲ獻ズ。是ニ於テ稚郎子皇子王仁ヲ師トシテ學ビ給フ。我が邦ニテ文學ノ興リシハ實ニ此時ニ基セリ。」

王仁ハ留マリテ阿直岐ト共ニ文學ノ事ヲ掌
レリ。王仁ノ後裔ヲ文氏阿直岐ノ後裔ヲ史氏ト
稱ス。兩氏ノ子孫大和河内ノ二國ニ居ル。其大和
ニ居ル者ヲ東史部河内ニ居ル者ヲ西史部トイ
ヘリ。

繼體天皇ノ時五經博士ヲ百濟ヨリ擢キ學生
ヲシテ文學ヲ講習セシメラレ給ヒキ。是ヨリ博
士相繼ギテ來朝シ文學大ニ發達セリ。推古天皇
ノ時聖德太子深ク佛法ヲ崇ビ文學ヲ好ミ始メ
テ留學生ヲ隋國へ遣ハシ給フ。是ヨリ百事隋唐

ノ風ヲ學ビ日用ノ文章モ亦自然ニ漢文ヲ用フ
ルニ至レリ。

第二十一課 孔子

孔子は二千年前支那の魯の國に生る。姓は孔
名は丘といへり。博く學藝に通じ、躬行最も篤く
して善く人を教導せしかば、今に至るまで世の
人いたく尊敬し、孔子と稱して、其名を呼ぶもの
なり。

孔子幼かりし時、他の兒童と遊ぶに、絶えて荒

高等讀本 三十二
々うきことをせず常に禮儀を學びたり。家甚た貧うかりうかば長うて吏となり出納の事を司るに計算最も精確にして少うの誤もなかりき。又牧畜の事を司る役となりうにこれも亦飼養宜きを得て牛羊蕃息せり。後魯國の執政となりし時外には強國あり内には亂臣ありて國政極めて困難なりうが孔子能く之を治め兵を用ひずして敵を屈し虐臣を誅して人民の苦を救ひ僅に三月の間をもて國勢を回復せり。

然れども孔子はかりにも己が志をまげて世

に合ふことを求めざりうかば永く魯國に仕ふることを得ず。去りて諸國に遊説せり。されど到る處の諸侯たゞ目前の小利にのみくらみて孔子を容れ用ふるものなう。因て孔子は其志を遂ぐる能はずして晩年復た魯國に歸り専ら子弟の教導に従事せり。三千餘人の子弟中兼て六藝に通ずるもの七十餘人の多きに及べりどろ。

抑世の卑賤より出で言行はれ志成り富貴顯榮に至りう人古來少なからざれども其身死すれば名も亦隨て消にざるは稀なり。孔子は貧う

きより起り、當世に志を得ざりしかども一言一行、盡く後世の模範となり、王侯より庶人に至るまで、尊崇せざるはなし。稱して聖人といふまこと、に宜なるかな。然れども、孔子も亦人なり、決して生れながらにして、萬事に通じたるにあらず。常に問ふことを好み、學びて已まず、遂にかく古今に比類なき聖人とはなりしなり。孔子嘗て曰へることあり、「吾は學びて倦まず、誨へて厭はず」と。以て其人と爲りを知るべし。

第二十二課 聖人のをしへ

人たるものは、常に善事をなさんと心かくべし。人を憐みいたはり、助け救ふより、大いなる善事はなし。向ふの人のよろこぶと喜ばざると、恩を知ると知らざるとにかゝはることなかれ。人は、兎もあれ角もあれ、たのれ獨り、善事をなすべし。是れ聖人の教にして、仁の道なり。又善事をすれば、善き報あるべしと思ふは、元來己が爲を思ひてする事にて、いまだ人慾の私をはなれ得ざる業なり、眞の善事とはいひ難し。聖人の善をす

高等讀本 卷一 三十四
るは己が身のためにせんと思ふ心なり。これ眞の善事なり。人より恩を受けて其恩を思はざるは人の道を知らざるなり。向ふの人恩を知らずといひて己れ怒るは其報を求むる私心あるに由るなり。向ふの人は恩を知らずとも我だに獨り善事をなしたらば其にて足りぬべし。此一事己れ常に心に修練すれどもどかく欲情離れがたく人を尤むる心のたこるものなり。戒むべし。公といふは私のますらぬをいふ。私といふは公にそむくをいふ。善事にも公と私との別あり。聖

人の教の善事は公の善事なり。報を求めんとしてなしたる善事は私の善事なり。公は身の爲にせず私は身の爲にするなり。此公私の差別をよく辨ふべし。父母を親愛するは私にあらず公の仁の根本なり。父母を愛する餘情の他人までに及ぶを仁の道とす。父母を愛せずして他人を愛するは私にして逆れる行なり。眞の善事にあらず報を求むる卑しき心なり。慎むべし。

高等讀本 卷一 三十五
第二十三課 養生の話

人には稀に若き時より不養生にて老ても身體のたどろぬものあり、それは百人の内の一にて、手本にはなりがたし。また身持よくて若死する者もあり、是も百中の一にて常といふべからず。夏は暑く、冬は寒さが定りたる氣候なれども、暑かるべき時に涼しきことあり、寒かるべきときにあたかなる事もあり。かゝる變を例として、夏暑く、冬寒さ備へをせずして有るべきや。その若き時の身持に心得あるべし。兎角我身をぬがものどれもふより、こゝろのまゝに身を

持つは大なる心得違なり。我身は親のかたみどれもふべし、親より傳へし物どては家をはぐめ萬のものをそこなはず、失をはずとするがつねなり。其親よりつたへし物の中にて、金をつみても又買ひがたき大せつ至極のものは、我身なり。ろの身をうこなふをたもはで、不養生をするは愚の甚だしきものにて、不孝の大いなるものなり。

第二十四課

身體ノ運動ハ、總テ筋肉ノ伸縮ニヨルモノニテ、筋肉ハ又運動ニヨリテ強壯ニ至ルモノナリ。故ニ冶工ハ常ニ鐵鎚ヲ上下シ、激シク手ノ筋肉ヲ動カスヲ以テ、其手ハ殊ニ強壯ヲ極ム。農夫ハ四肢軀幹ノ運動均一ナルヲ以テ、全體ノ筋肉齊シク強壯ナリ。唯學者ハ概シテ終日凡ニ凭リ紙筆ノ類ヲ執ルニ過ギズ。シタガツテ、筋肉ヲ勞スルコト尠キガ故ニ、其身體多クハ柔弱ニ傾クモノナレバ、學業ノ暇ニハ務メテ運動セシムコトヲ心懸クベシ。

勞動ノ後ハ、必ず身體ヲ靜息スベシ。然レドモ大ニ勞動シタル後、直チニ休息スルハ却テ宜シカラズ、暫時他ノ輕易ノ業ニ從ヒ、若クハ嬉戲ヲナシテ、輕ク運動スベシ。若シ勞動シテ汗ノ出ヅルアルトキハ、直チニ皮膚ヲ涼風ニ曝サズシテ、衣服ヲ纏ヒ、徐々ニ休息スベシ。要スルニ、身體ノ模樣ヲ急變スルハ、健康ヲ保ツノ道ニアラズト知ルベシ。

運動ハ、須ラク空氣清淨ノ地ニ於テスベシ。空氣清淨ナレバ、久シク運動シテモ、疲勞ヲ覺ユル

コト少ナシ。又運動ハ陽地ニ於テスルヲ可トス。人ハ日光ノ恩澤ヲ蒙ルコト猶草木ノ日光ニ頼リテ生育スルガ如シ。陰地ニ生ズル草木ハ陽地ニ生ズル草木ニ比シテ其色淡ク且柔ナルガ如ク。人モ亦卑濕ニシテ鬱閉セル家屋ニ住アルモノハ高燥ニシテ開豁ナル土地ニ住スルモノヨリモ虚弱ニシテ皮膚モ亦蒼白ナリ。又精神ノ爽快ナルトキハ久シク勞動スルモ疲勞スルコト少ナキモノナリ。例ヘバ獵ヲ好ム者ガ終日山阪ヲ馳驅スルモ疲勞ヲ感ズルコト少ナキガ如シ。

サレバ精神ハ常ニ爽快ナランコトヲ要ス。

「使フ鋤ハ常ニヒカリ溜リ水ハ腐リ易キガ如ク、人ノ身體モ運動シテ怠ラザレバ筋肉益強壯トナリ、常ニ坐食シテ運動セザレハ筋肉次第ニ柔弱ニ陥ルベシ。」

第二十五課 口の出し入れ慎むべし

一言の過にて莫大の禍となり、一事の過にて一生の憂となる、慎むべし。平生慎みある人も、事に因り時に因りて、怠りたゆみぬれば、一言一事

の過に因りて思ひの外に大なる禍とをなすことあり。一言一事も慎まざるばあるべからず。

古語に「病は口より入り、禍は口より出づ」と云へり。言葉を慎みて、妄りに口より出ださざれば禍なく、飲食を慎みて、妄りに口に入れざれば病なく。病と禍との出で來ることとは、天より降るにあらず、皆口より起ると古人云へり。口の出ず入れ慎むべし。

貝原篤信……大和俗訓

第二十六課 呼吸

人ノ息ハ二ツヨリ成ル。一ハ内ヨリ呼キ出シ、一ハ外ヨリ吸ヒ入ル、ナリ。此二ツヲ合セテ呼吸トイフ。一旦呼キ出シタル息ハ、人體ニ害アレバ、決シテ再ビ吸ヒ入ルベカラズ、サレバ寢ル時、夜具ニテ頭ヲ覆フ癩アル人ハ、終ニ病ニカ、ルニ至ルベシ。是レ一タビ呼キタル息ヲ、幾度トモナク吸ヒ入ル、ヨリ起ルナリ。

又密閉シタル室内ニ、數多ノ燈火ヲ點シ、又ハ爐火ヲ熾シ、ナラシメテ、多人數コ、ニ集マリ居

高等讀本 第三卷 三十九
ル時ハ暫クノ間ニ頭痛ヲ感ジ、氣分次第ニ悪クナルベシ。若シ久シク其室内ニ留マリ居ラバ、終ニハ眩暈シテ仆ル、ニ至ルコトアリ。是レ他ナシ、呼吸又ハ燃燒等ニヨリ、室内ニ炭酸瓦斯充滿シテ、人ノ健康ヲ保ツニ不適當ナルニ由ルナリ。人類ノ吸ヒ込ム息ト呼キ出ス息トノ異ナル點ハ、如何トイフニ、吸ヒ込ム息ハ固ヨリ通常ノ空氣ニテ、概子酸素ト窒素トヨリ成リ、之ニ極メテ少量ノ炭酸瓦斯ヲ加ヘタルモノナレドモ、其呼キ出ス息ハ極メテ純粹ナラザル空氣ニテ、即

テ動物ノ身體ニ有害ナル炭酸瓦斯ヲ多量ニ含ミ居レリ。
已ニ前ニ述ブル如ク、密閉シタル室内ハ呼吸及ビ燃燒等ヨリ生ズル炭酸瓦斯ノ漏レ出ヅヘキ間隙ナキガ故ニ、害ヲ人身ニ及ボスコト甚シキモノナレバ、常ニ此有害ナル瓦斯ノ排除法ニ注意セザルベカラズ。譬テ密閉セル室内ニ炭火ヲ熾ンニシテ臥シ居タル人アリシガ、終ニ永眠ノ身トナリテ、再ビ覺メザリシトイヘリ、豈恐レザルベケンヤ。

人類及び他ノ動物ノ呼出シタル炭酸瓦斯ハ、植物ヲ養フ材料トナルモノニテ、梅櫻、廬山、吹ヨリ、牡丹、芍藥、秋ノ七草ニ至ルマデ、我等ガ美シト見ル花ノ色、快シト嗅グ花ノ香、皆盡ク此瓦斯ノ養ニヨラザルハナシ。サレバ我等ガ庭園ヲ散步シツ、呼出スル息ハ、皆是レ周邊ノ樹木、花卉ヲ養フ肥料タラザルハナシ。彼ノ鬱々タル綠葉ハ、炭酸瓦斯ヲ取り、日光ノ力ニヨリテ之ヲ炭素ト、酸素トニ分テ、炭素ヲ留メテ自己ノ養料ニ供シ、酸素ヲ空氣中ニ放チテ、再ビ我等ノ肺臟ニ入ラ

シム、此ノ如ク動植ニ物ハ相待チテ其生活ヲ全クスルコトヲ得ルモノナリ、其配合亦妙ナラズヤ。

第二十七課 植物の話 其一

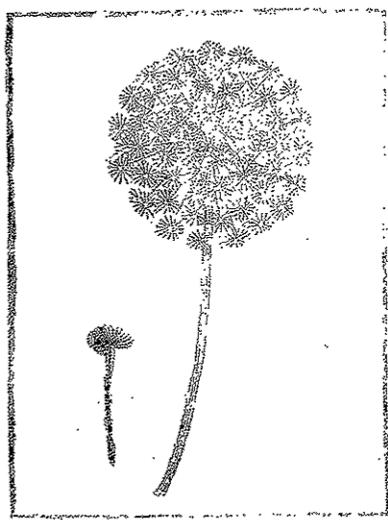
植物は動物と全く其質を異にすれども、其生育の模様に至りては、恰も人類の生育するに異ならず。植物の種子の尙ほ未だ成熟せざるものは、恰も小兒の如く、又種子を生ずる植物は、恰も其母に似たり。母たる植物は、小兒たる種子を能

く看護して、之に食物を與へ、住家をも與ふるなり。此住家とは果實即ち是なり。

種子及び果實は自ら食料を得て、其身を養ふこと能はず、之を供給するは、其母たる植物の役目なり。されば植物は種子及び果實の滋養となるべき食料を得るに、其根と葉とを利用し、即ち根は地中より、葉は空氣中より、各滋養分を吸収するなり。

今種子を地味の好き所に播きて、時氣の適當するときは、間もなく細小なる植物の發生を見るべし。而して其植物は次第に根を地中に下し、幹及び枝葉れのづから生茂り、立派なる一箇の植物となりて、終に花を着くるに至る。花には雄藥と雌藥とあり、從て果實を結び種子を生ずるに至る。其順序自ら一定して違ふ事なく、再び同一の植物を發生す。柿の種子より柿の樹を生じ、米より稻を生ずるが如し。

種子は花と同じく其狀種々ありて、一様ならざれども、圓くして豌豆の如きもの甚だ多し。又草類に至ては、種子の大さ砂粒に過ぎざる程の



蒲公英の種子

もの殊に多し。

又橢圓形の種子あり、豆の類是なり。又平扁なる種子あり、西瓜、冬瓜の類是なり。或は細き絹絲の如き

翼ある種子あり、蒲公英の類是なり。

種子はその形状大小の如何に拘はらず、必ず内部には極めて微小なる嫩植物即ち胚を含む。此胚よりして根を延き幹を發し、枝葉を生じて遂に完全なる植物とはなるなり。

第二十八課 かんにんの四字

或る人文盲なる者を異見して、世の交りは他の事はいらず、唯堪忍の二字をよく守るべし」といへば、文盲の人は頭を傾け「かんにん」とは四字にて候はずや」と指をもて數へ「御許にはねぼし違へなるべしか……ん……に……んと四字にて候ふ」と云ふ。異見せし人「愚昧の人か、堪忍とはたへしのぶとよみて二字なり」と云ふ。文盲の人又頭を傾け「たへしのぶならば又一字ふえたり。五字

となり候ふべし。何と仰せありとも吾等は四字
と思ひ候へば四字にてかんにんは致し候ふを
り」といへるにその人又云ふ、汝が如き愚昧の文
盲は實に諭し難し人に似て蠢同様なり。己が儘
にすべし」と大に憤りければ文盲の人何とも仰
せあるべし。吾等はんの四字を知り候へ
ば悪口せられても、少くも腹立ち候はざるなり
とて笑ひ居しとぞ。其智には及ぶべく其愚には
及ぶべからず。

柳澤皇恭……雲萍雜誌

第二十九課 宇宙ノ洪大

諸子ガ家ノ庭園ハ如何ニ廣シトモ、市街又ハ
村落ノ一小隅ニハ過ギズ。諸子ガ極メテ大ナリ
トスル市街村落若クハ山林原野モ、是レ國中ノ
一小隅ニハ過ギズ。又我が大日本帝國ノ土地ハ、
甚ダ廣大ナルガ如クナレドモ、モトヨリ地球表
面ノ一小部分タルニ過ギザルナリ。

諸子、請フ地球ノ圖ヲ見ヨ。我が大日本帝國ハ、
果シテ如何ナル幅員ヲ有スルカ。地球ヲ橙子ニ
譬フレバ、我が帝國ハ、其皮面ノ小凸凹ニ過ギズ。

地球ハ實ニ廣大ナルモノニテ其周圍ハ一萬零
百九十三里アリ然レドモ之ヲ宇宙ノ大ニ比ス
ルトキハ其小ナルコト恰モ一粟ノ滄海ニ於ケ
ルガ如シ宇宙ノ洪大ナルコト豈驚クベキニア
ラズヤ。

太陽ヲ見ヨ地球ヲ距ルコト三千八百餘萬里
ナリ而ルニ猶斷エズ地球ニ光ト熱トヲ與フ。又
我ガ地球ノ如キ遊星八個アリ中ニモ火星土星
木星天王星海王星ノ如キハ其大サ何レモ地球
ニ數倍スルモノナリ。且天上ニ散布セル星辰ノ

中ニハ我ガ地球ヲ照ス太陽ノ如ク赫々タル光
ヲ放チテ他ノ世界ヲ照スモノ多シト云フ。然レ
ドモ我等ガ眼ニハ唯螢火ノ如ク見ユルノミ其
距離ノ遠キコト推シテ知ルベシ。而シテ此太陽
ト衆星トハ皆宇宙ノ間ニ麗レリ以テ宇宙ノ洪
大無邊ナルヲ知ルベシ。

第三十課 高橋東岡

高橋至時字は子春東岡と號す。通稱作左衛門
を以て世に知らる。もと大阪の人にて世々御定

高橋 傳 本 卷之七 五十五
番同心たり。初め豊後の人麻田剛立に就きて天文の學を修め、精しく曆象に通ぜり。寛政の初め、曆法の錯誤あるを疑ひ、旁ら西洋の曆書を參考し、以て新曆を作り、同七年之を幕府に上りしが、從來の曆に較べて頗る精密なりしかば、遂に改曆の議ありて江戸に徵され、擢んでられて新曆取調の主任となりぬ。同九年十二月に至り、澁川主水等と新たに曆法を撰定して、之を天下に頒ちたり。世に寛政曆といふは是なり。此時、曆象の事に關して著述せる書三十餘卷あり、これを曆

説と名づく。

東岡人と爲り、眞率にして、當世の譽を求めざれども、其學術自ら人の信服を來たせるにや。從學する者極めて多かりき。伊能東河は其中の高弟にて、地學に於ては、をさしく、東岡が星學の功にも譲らざりしとぞ。東岡享年四十一にして病んで歿せり。實に文化元年の正月なりき。惜むべし。此人長く存命してあらば、唯天象星曆のこととのみには止まざりしならん。其他の事業の軀と共に埋没せしことを遺憾なれ。

東岡が妻も亦古の烈女の風ありき。東岡未だ
 微祿にて浪華に住める頃なりけん庭に杏なる
 柿の樹ありて秋毎に枝もたあむばかりに實り
 ければこれを市に售りて生計を資けし事もあ
 りき。或る年其邊の兒童闇夜にまぎれて盗みと
 ること度々なりしかば果ては夜毎に樹下を見
 巡りて其守りの爲に夜をあかすに至れり。或る
 日の夕暮東岡外より歸りけるにさばかり大なる
 樹を根ぎはより伐り倒してありければ大に
 驚きいそぎ妻を呼びて「何人の仕業ぞ」と問へば



高橋東岡夫婦問答の圖

「妾のいわざなり」と答ふ。そは
 何故ぞ物に狂ひしか」といさ
 まき責むれば妻徐かにいふ
 やう「君は必ず天象の學によ
 りて家を興し給ふべき人な
 り。されば勉めて天體をこそ
 窺ひ給ふべきにやなく。此
 樹の爲にあたらしと精神と
 を費し給ふことこの口をく
 此樹なくば學業專壹にもな

高等讀本 卷之一
 り給はんとてかくは計らひ侍りしなれど。東國
 此言葉に激せられて遂に此業を以て世に鳴る
 に至りしなり。さて妻は東國に先たちて身まか
 りぬとぞ哀しうかな。

高等讀本卷之一終

版權所有

高等讀本 全八冊

第一	明治二十六年二月二十五日發行
第二	明治二十六年二月二十五日發行
第三	明治二十六年二月二十五日發行
第四	明治二十六年二月二十五日發行
第五	明治二十六年二月二十五日發行
第六	明治二十六年二月二十五日發行
第七	明治二十六年二月二十五日發行
第八	明治二十六年二月二十五日發行

一、二、三、四、五、六、七、八冊

著作 山縣佛三郎

發行 小林義則

發售 文學社

印刷 文學社工場

東京市日本橋區本町四丁目十六番地
 東京市神田區錦町三丁目十二番地

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 7 2 5 5 8 4 a

福岡教育大学蔵書